

【公報種別】特許法第17条の2の規定による補正の掲載
 【部門区分】第7部門第3区分
 【発行日】令和4年8月19日(2022.8.19)

【国際公開番号】WO2020/126411
 【公表番号】特表2022-511745(P2022-511745A)
 【公表日】令和4年2月1日(2022.2.1)
 【年通号数】公開公報(特許)2022-018
 【出願番号】特願2021-528450(P2021-528450)
 【国際特許分類】

10

H 0 4 N 1 9 / 1 1 7 (2 0 1 4 . 0 1)
H 0 4 N 1 9 / 1 4 (2 0 1 4 . 0 1)
H 0 4 N 1 9 / 1 8 2 (2 0 1 4 . 0 1)
H 0 4 N 1 9 / 7 0 (2 0 1 4 . 0 1)
H 0 4 N 1 9 / 8 2 (2 0 1 4 . 0 1)
H 0 4 N 1 9 / 8 6 (2 0 1 4 . 0 1)
H 0 4 N 1 9 / 1 9 6 (2 0 1 4 . 0 1)

【F I】

H 0 4 N 1 9 / 1 1 7
 H 0 4 N 1 9 / 1 4
 H 0 4 N 1 9 / 1 8 2
 H 0 4 N 1 9 / 7 0
 H 0 4 N 1 9 / 8 2
 H 0 4 N 1 9 / 8 6
 H 0 4 N 1 9 / 1 9 6

20

【誤訳訂正書】

【提出日】令和4年8月9日(2022.8.9)

【誤訳訂正1】

【訂正対象書類名】明細書

30

【訂正対象項目名】0102

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0102】

本発明の一実施形態によれば、Kは計算が簡単になるように(過度の復号化の複雑さを導入しないように)選択される。例えば、そのような実施形態では、Kは単にクリッピング関数:

$$K(d, b) = \max(-b, \min(b, d)). \quad (11)$$

である。または同等に

$$K(d, b) = \min(b, \max(-b, d)). \quad (12)$$

40

である。

以下に説明する代替関数のいくつかとは対照的に、クリッピング関数は局所勾配の高い値に対して消失しない(換言すれば、クリッピング関数 $f(x)$ は、 x が不等性に近づくにつれてゼロに向かって収束しない)。しかし、このような単純な関数を使用した圧縮結果は、より複雑な関数を使用した場合と同じくらい効率的であり、より良好でさえあり得ることが実験的に観察されている。実際、クリッピング関数は局所勾配の高い値に対して消失するのではなく、単にそれらをクリッピングするだけで、鋭いエッジ遷移を考慮し続けることを可能にし、一方、その鋭いエッジ遷移領域の周りに存在する高い分散の影響を制限することができる。アーチファクトは鋭い遷移の周りにより強く発生するので、これは興味深い。

50

式(9)のフィルタリング公式を用いたこのクリッピング関数 K の等価関数 K' は、

$$K'(n, c, b) = \max(c - b, \min(c + b, n)). \quad (13)$$

である。または、同等に、

$$K'(n, c, b) = \min(c + b, \max(c - b, n)).$$

である。

クリッピング関数は、 b が最大可能サンプル値（例えば、画像ビット深度の2乗）以上になるとすぐに、式(8)を満たす。

10

20

30

40

50